

## 「私の教育実践」

大川良文 Yoshifumi Okawa  
京都産業大学 経済学部 / 教授  
元滋賀大学 経済学部 / 准教授

本稿では、私が担当してきた教養教育科目「世界経済の現状：国際経済学入門」について書いていきます。この講義は、比較優位の意味や国際収支の読み方、為替レートの変動要因など国際貿易論、国際金融論、開発経済論などの基礎概念について簡単に説明した上で、TPP(環太平洋経済連携協定)の交渉内容、欧州ソブリン危機はなぜ起こったのかなど、新聞をにぎわす国際経済問題について解説する講義です。各回の講義タイトルは次のようなものになっています。1.貿易利益、2.国際分業、3.貿易政策、4.企業活動の国際化、5.グローバリゼーションと雇用、6.外国人労働者問題、7.WTOとFTA、8.グローバルルール、9.国際収支、10.為替レート、11.為替制度、12.通貨同盟と欧州ソブリン危機、13.工業化戦略、14.国際資本移動と途上国

この講義の一番の特徴は、学生に対して「毎週」レポートを課していることだと思います。学生には毎回の講義の最後にレポート課題を出し、次の講義の直前までに教務係の提出ボックスにレポートを提出してもらいました。字数制限は2800字以上、課題は講義内容に関する設問で、講義資料を見ながら講義内容をまとめればよいというものです。レポート未提出や講義内容を正しく理解しているとは思われないレポートの提出が4回以上あると成績評価は「不可」となります。ただし、ネットからの盗作や他人のレポートのコピーなどを提出することが1回でもあると成績評価は自動的に「不可」となります。学期末試験は行わず、レポートのみで成績を付けます。以上のことを第1回の講義で学生にアナウンスし、第2回の講義から最終講義を除いて毎回レポートを提出してもらいました。

このように毎回レポートを課すことで成績を評価することにしたのにはいくつか理由があるのですが、一番の理由は、「世界経済の現状」は講義の範囲が幅広く、学生が学期末試験前に集中して勉強しても、内

容全体を頭の中に叩き込むのは難しいのではないかと思います。最近私が学生の時とは違い、学期末試験の期間が短くなり、学生は短期間で多くの科目の試験勉強をしなければならず、時には1日に2科目、3科目と試験をこなさなければならないこともあります。このため、教養科目でしかも講義範囲が幅広く多くの事柄を頭の中に叩き込まなければならない「世界経済の現状」の試験対策は後回しにされるのではないかと、そうすると学期末試験を実施したとしても学生に質の高い試験解答は期待できないのではないかと考えたのです。そうであるならば、試験期間前に試験対策をさせるよりも、レポートを書かせることで毎回講義内容を復習させる方が授業内容を学生に理解させるためには効率的だろうと考えたのです。

毎回の講義ごとにレポートを提出させると、2800字以上のレポートを全部で13回ほど提出してもらわなければならないとなります。それだけ大量のレポートを、最終講義後にまとめて採点するというのは気の遠くなる作業となります。また、学生の立場からしてもそれだけ大量のレポートを書いて「不可」なんてことになったら到底納得できないでしょう。ですので、レポートの評価については、毎回のレポート提出後1週間以内に採点し、「優」「良」「可」「不可」の判定をした上でSUCCESSを通じて学生に連絡をしました。そうすることで、課題内容を理解しようとせず自分勝手な解釈を書いてきたり、文章ではなくレジメのような箇条書きをしたりといった質の低いレポートを書いてくる学生には早い段階でこのようなレポートでは単位を得ることはできないということを伝えるようにしたのです。4回「不可」の評価がついてしまうと、その後のレポートはいくら書いても単位にはつながらないことがわかるので、講義前半で立て続けに「不可」の評価を受けた学生は早々に脱落することになります。一部の学生は2度3度「不可」の評価が続いた時点で「なぜ自分のレポートは不可なのか、どうすれば不可でないレポー



トになるのか」ということを私に直談判します。その場合には、丁寧にアドバイスし、その後のレポートで改善してもらうことにします。実際、アドバイスをすることでその後のレポートでは「不可」をもらうことなく単位を取得した学生も数名います。

レポートが4～5回続くと、学生のレポートの質も安定してきます。ここまで来ると、レポートを出し続けてきた学生は、それまでの苦労を無駄にしたいと思わずレポートを休むことなく提出します。私も毎週レポートを見ているので、質の高いレポートを書く学生、文章は下手ながら一生懸命レポートを書いている学生など、レポートを書いている学生の特徴がわかってきます。そうすると、「不可」のレポート評価はかなり少なくなり、採点は楽になっていきます。次に注意することは学生に「自分の提出したレポートはきちんと教員に読まれている」とのメッセージを伝えることです。毎回「優」の評価が続く学生でも、少しレポートの質が落ちたときには「良」に評価を下げたり、その逆であったり、学生に応じてなるべく成績に濃淡をつけるようにすることで、自分のレポートはちゃんと読まれているんだということを学生に意識させるようにしました。

このように毎週レポートを提出させて次の週にはその評価がわかるようにしていくと、講義最終盤に問題が生じます。それは、講義が残り3回を切ると、真面目にレポートを提出してきた学生は、残りのレポートを提出しなくても自分はすでに単位が取れたことがわかり、講義に出席するインセンティブがなくなってしまうことです。ですので、講義の最後の方では、「一部の学

生はもう講義に来なくても単位は取れますが、そういう頑張った学生にこそ最後まで講義を聞いてほしいので、レポートを提出しなくてもいいけど講義は是非聞きに来てください」とお願いすることになります。いつもこの時期になると、出席者が激減したらしょうかと不安になるのですが、幸いここまでレポートを提出してきた学生は、非常にまじめか、もしくは国際経済に関心が高いからなのか、単位が取れたとわかっていても、その後の講義に出席し、レポートも提出してくれる人がほとんどでした。

このように毎回レポートを提出させる形式で「世界経済の現状」の講義は過去6回行われました。講義を通して出席した学生からは授業評価アンケートで常に高い評価を得ており、やる気のある学生にとっては有意義な講義をしてきたと自負をしています。しかし、このような講義の進め方はあまり他の先生方にはお勧めできません。やはり、毎週レポートを読んで評価をするには多くの時間を使いますし、何よりもこのような形式の講義が増えると学生の負担が大きくなります。そういう意味では、非効率な講義だと思います。次に似たような講義を企画する時は、もう少し効率の良いやり方を考えていこうと思っています。